

パラバドミントン ^{ながしまおさむ}長島理選手 インタビュー！！

『パラバドミントンで、世界の舞台の頂点を目指して』

鴻巣市（旧吹上町）出身のパラバドミントン、日本のトッププレーヤー、^{ながしまおさむ}長島理選手にオンラインでお話を伺いました。



バドミントンとの出会いは？

小学校の時は、サッカーとスイミングをやっていました。小6の時、大芦小学校の持久走大会で1番になったこともあり中学校の部活動は、サッカー部か、陸上部かなと思っていました。吹上中学校に入学し、「せっかく部活動をやるのだから運動部としてやり抜きたい。」との思いがあり、当時、吉田先生という、とても熱心な顧問の先生が指導されていたこともあり、バドミントン部に入部しました。

中学校の体育館は狭く、授業終わりに他の部と場所の取り合いをしながら練習した記憶があります。バドミントンは風と光を嫌うので、カーテンを閉め切りで練習していると、「バドミントン部は、根暗だ。」「暑いのに閉め切って。」と散々言われていた記憶があります。「暑いぞ熊谷」の近くの吹上で、夏はものすごい暑さになりますよね。暑さの中で練習したというのが、今も生きているという気がします。

その後、高校でも継続しましたし、ケガをした後も継続しているので、中学校でのバドミントンとの出会いが、現在に至っているということなのでしょうね。

中学生の時の成績は、県大会予選敗退。高校では、県大会（埼玉県大会・ダブルス・ベスト8）に行けるようになりました。

事故でおケガをされた時のこと、現在の障がいの状況は。

大学2年が終わる3月、帰省した時のことですが、免許を取ったばかりで親の車を借りて運転の練習をしていたところ、土手で脱輪してしまい、何とか立て直そうとしている時に車の下敷きになってしまいました。車が私の体に乗ってきたという感じです。たまたま目撃していた人が通報してくれ、九死に一生を得た状況でした。

ケガはいわゆる「脊髄損傷」で、脳からの命令が脊髄を通り足を動かすのですが、脊髄の神経が切れて、足を動かすことが出来ない障がいです。私の場合、体幹機能障がいもあり、腹筋も背筋も難しいです。等級は、1級です。

事故でおケガをされた時の気持ちは。

ケガをして、東松山市の病院に搬送され、翌日、緊急手術になりました。搬送される時に足が動かないことは気づいていて、その時「これって、脊髄損傷ってやつですか。」と尋ねたのですが、「ちゃんと調べないとわからないから・・・。」と言われ、病院で検査を受けても、「う～ん、良くなるには時間がかかるかもしれないね。」と、オブラートに包んだ感じの説明でした。当時は「なんで足が動かないのだろう。」どんなに頑張っても動かさずとも、動かないので、すごく焦るというか、不安になるというか、そんな感じでした。自暴自棄になることはあまりなかったのですが、「本当にこれからどうなるのかな～。大学に復帰出来るかな～」と、いろいろ思いながら過ごしていたと思います。

3か月後、所沢の国立リハビリテーションセンターに転院しました。転院時、MRI画像を見せてもらうと、神経の束が切れているのが私にもわかりました。「あ～、だから足が動かないんだ。」と思えて、だったら足を動かすことを考えるよりも、車いすの生活をしていく必要があるから、そちらを向いていこうという気持ちになりました。

また、国立障害者リハビリテーションセンターに転院してからは、同年代のケガをした人が多く、一緒にスポーツをやったり理学療法をする中で、競争というか切磋琢磨してリハビリに励むという環境でやれたのが、前向きになれたもう一つの理由だと思います。

ケガをして、急に出来なくなったことは多いけれど、それから少しずつ回復して出来ることが増えていく中で、喜びを感じながら回復していったと思います。

障がいを受容するまでの過程は。

一つには絞れないのですが、MRI画像を見て「もう駄目なんだ。」とスパッとあきらめられたことが、私にとってキーポイントだったと思います。

もう一つ、大学に戻ろうと思った時に高校からの友人が、学科内やサークル内の友人の手紙をたくさん集めてくれました。「長島、待ってるよ。」その時は号泣しました。「あ～、待っていてくれる人がいるの

だから、待つべきところに戻りたい。大学のバドミントンサークルに戻りたい。そのためにリハビリを頑張ろう。」という思いにさせてもらったと思います。

パラバドミントンとの出会いは。

大学のバドミントンサークルに戻るころ、車いすのバドミントンがあることもわかりませんでした。よくよく調べてみると、車いすでのバドミントンがあることを知り、情報を仕入れるために、障がい者バドミントンクラブに時々顔を出しつつ、主戦場はサークルの日々を過ごしていました。

週末に障がい者のバドミントンクラブが活動していたので、徐々にそちらにシフトしていきました。活動を始めると大会に誘われるようになり、自分の居場所がそちらに移っていったという感じかと思えます。

当時も現在も、バドミントン経験者が車いすバドミントンをやるという訳ではなく、もともとラケット技術があるので、練習に行けば、「上手だね。」「〇〇大会に出てよ。」と言われ、つきあいで仕方なく「出るか〜。」といった感じになっていきました。その後、合宿に参加すると、トップ選手のプレイを見かけることも多くなり、「あ〜、こうなりたい。」「日本チャンピオンになりたい。」といった気持ちが、徐々に芽生えてきた感じでしょうか。



パラバドミントンの特徴(クラス・ルール)は。

大きく分けて車いすと立位の2つのクラスに分かれます。車いすのクラスは、腹筋のきく人ときかない人とは動きのスピードが全然違うので、クラスが別になっています。その他、立位の足の障害のクラスは障がいの重い人、軽い人の2つに分かれ、腕の障がいの人、低身長（ドワーフ）の人の合計6つのクラスに分かれます。

私のクラス（WH1）のルールはシングルスの場合、一般のバドミントンコートの半分で、前に近い所に落ちたら、アウトになり相手の得点になります。そういう意味ではコートは半分以下の面積になっています。

私は、令和元年度のチャンピオンになりました。今年は12月に大会が開催される予定です。

（連盟より） 12月の日本選手権は、ライブ配信をするので、ぜひ見てください。詳細は連盟のHPにアップするのでご確認ください。

パラバドミントンの魅力・見どころは。

パラバドミントンは、車いすと立位のクラスでは戦術が全く変わります。車いすの場合はあまりスマッシュを打つことはなく、相手の逆を突いたり、遠くに打ったり、車いすを引っ張り出して前に落としたりします。腕の障がいのクラスは、障がいがある片方の場合、普通のバドミントンとそれほど変わらないので、ダイナミックでスピーディーなプレイだったりします。立位の足の障害の場合は右足が悪い、左足が悪いかによっても動き方が全然違います。プレイスタイルはいろいろとありそれによって動き方、動かし方、戦術が違ってきます。「こういう障がいのある人はこう動く。」「このクラスの人はこちらが苦手そう。」とか、少し玄人向けの見方かもしれませんが障がいごとの違いが見えて、面白いかと思えます。

車いすバドミントンは、小さいコートですが四隅を突いて相手を崩してから決めにいく、車いすでも思い切りのけ反り、残った機能をぎりぎりまで使って大きく打つプレイもあるので、初めて見た方は「後ろにひっくり返ってしまうのではないか。」と言われることもあります。そうしたプレイも見どころかと思えます。

パラリンピック出場までの道のりは。

大雑把に言えば日本の一位、二位は関係なく、世界のランキングで決まります。ダブルスがすごく重要で、ダブルスに出る人がシングルスにも重複して出られるというルールになっています。私の場合、現在シングルスにフォーカスしているので、ざっくり世界ランキングを基準に決めるという説明になるかと思えます。

自分では、当落線上と考えています。あと1大会残っているのですが、結果しだいで判断されるかと思えます。良い結果を残したいと思えます。

（応援しています。）

新型コロナウイルス感染拡大でも、モチベーションを保つ秘訣は。

1年後のオリンピック、パラリンピックに向けてというよりも、1か月後、2週間後のスパンで、今出来ないことを出来るようにするとか、少しでもスピードをあげられるようにするとか、今だと日本選手権に向けてとか、小さいステップを作ってモチベーションを保つようにしています。秘訣というか考え方になるでしょうか。

趣味は。

クイズが好きなんです。「アタック25」に4年前に出たんです。「アタック25」は、1回出ると5年出られないというルールがあるので、パラリンピックで活躍した後、また出たいと思っています。パネルを6枚取り、6万円もらいました。特別使うでもなく、臨時収入になったくらいです。

現在、鴻巣とのつながりは。鴻巣のイメージは。美味しかったものは。

実家が吹上にあるので、たまに帰ったりしています。12年間愛知県に住んでいた時は、盆と正月くらいしか帰れなかったのですが、最近、東京都に住むようになり、帰省する機会が増えました。文字通り故郷なので、本当に自分の基礎、考え方のベースを作ってくれたのは吹上であり鴻巣であると思っています。吹上の土手から見ると、めちゃくちゃ平地が多いですよ。大芦橋から見ると、遠くには山がありますが、ずっと平地で、「あ〜、自分が生まれた所はこうだったんだ。」と改めて思います。本当にいいところで一番落ち着きます。故郷、鴻巣・吹上、また実家って。実家は、両親二人で元気にしています。吹上では、ゼリーフライが有名ですよ。あ〜、子どもの頃行った町民プールのコロケ、1個50円で、おいしかったですね。そんなのでは、あまり良い回答ではないですね。(笑) あとは、母親の手料理でしょうか。



パラリンピック東京2020大会に向けて。

開催することを信じて練習していますし、出場できることを信じて、メダルが取れることも信じて、今から準備していきたいと思っています。地元、鴻巣の皆さまには応援いただければ力になります。

障がい者理解について、メッセージを。

障がい者スポーツをやっている人が障がい者の代表ということもないと思いますが、「そういう人もいるんだ。」と知っていただくことが大事だと思っています。重い障がいがある人も、生活が大変な人も、でも、スポーツをやっている人がいる。とそれを含めて障がい者だという風にとらえていただくのが、「インクルーシブ（※1）」というか、知っていただくことが共生社会の実現の一助になると思って、接してもらえると嬉しく思います。パラアスリートではあるかもしれませんが、普通の人なので、まず接する機会を作っていただくと理解いただけるが増えると思いますので、ぜひ、関っていただけるとありがたいと思います。

※1 インクルーシブ【inclusive】

包含しているさま。含んでいるさま。包括的な。

福祉的な解釈では、「障がいのある人、障がいのない人たちとが、みんな一緒に理解し助け合いながら、共に暮らす社会」のことを指します。



鴻巣市の皆さんにメッセージを。

18歳まで鴻巣市に育てていただいて、それがベースになって、現在があると思っています。競技者としてこれからも続けていきたいという思いがありますので、引き続き、丸藤正道まるふじなほみち（鴻巣市（旧吹上町）出身、プロレスラー、こうのす観光大使）に続く地元と星として頑張っていきたいと思いますので、応援いただけるとうれしいです。

どうぞよろしくお願いいたします。

長島選手へのインタビューを通して。

長島選手にインタビューをさせていただき、障がいを受容をされ、わずか1年での大学復帰、その後、大学院修士を修められ、なお、バドミントン、パラバドミントンを継続され、社会人になっては職業人として活躍され、パラバドミントンでも頭角を現し、世界を相手に挑戦をし続けている姿に感銘を受けました。

今回、取材をさせていただき、こちらの要領を得ない質問に対して、的確に丁寧に回答いただいた、そのクレバーさにも感服しました。

中でも、見守ってこられたご両親・ご兄弟、長島選手を囲む学生時代からのご友人たち、会社での同僚の方々、それぞれの居場所で出会われた方々、“人”が長島選手の強さと逞しさ、また豊かな人間性を育ててこられたと思いますし、また長島選手の魅力、求心力がそうさせたのだろうと思いつながりながらお話を伺いました。

この度、ふれあい広場の企画で、パラバドミントン長島選手にお話しを伺う機会に恵まれましたことに、感謝！！

パラリンピックまで、1年を切りました。

コロナ禍において、不安も多い毎日ですが、鴻巣市民一丸となって、パラバドミントン長島選手の活躍を応援していきましょう。

この取材においてはご協力をいただきました、

（一般社団法人）日本障がい者バドミントン連盟 細矢様

江戸川区文化共育部スポーツ振興課障害者スポーツ係 藤戸様

の多大なるご協力をいただきましたことに感謝申し上げます。